

〔研究ノート〕

## オーストリア現代文学と越境文学

—二つのシンポジウムを終えて—

土 屋 勝 彦

名古屋学院大学国際文化学部

### 要 旨

オーストリア現代文学の特徴を考察するシンポジウムと、森鷗外と多和田葉子という二人の越境作家の比較をめぐるシンポジウムを終えて、改めて両シンポジウムに通底する視座を検討してみる。二人の日本の越境作家において見られる日本近代文学の構築と日本語文学の解体・革新という対照性によって特徴づけられる両作家の文学活動・文学意識には、「オーストリア国民文学」という地域性ないし規範と、「ドイツ語圏文学」という国民国家を超える普遍性ないしグローバル化志向との対照性に対応している。これは、文学の有する「越境性」という特質の表れともいえる。越境性は、内なる他者性を自己開示することで普遍的な人間性への問いにつながり、特殊を通じて普遍に向かう文学の本質を示すものとなる。

キーワード：オーストリア文学，越境文学，国民文学

## Österreichische Gegenwartsliteratur und Interkulturelle Literatur

— Anmerkungen zu den zwei Symposien im Frühling 2017 —

Masahiko TSUCHIYA

Faculty of Intercultural Studies  
Nagoya Gakuin University

---

発行日 2017年10月31日

## はじめに

2017年春に二つのシンポジウムを企画・挙行了。すなわち日本独文学会におけるシンポジウム「ポスト・ハプスブルク神話」と、日本比較文学会におけるシンポジウム「森鷗外と多和田葉子」である。本稿は、この二つの主題をつなぐ観点をいくつか提示し検討するささやかな試みである。

### 日本独文学会シンポジウム「ポスト・ハプスブルク神話—グローバルゼーションとローカルな土着性の狭間に動くオーストリア現代文学」

オーストリア現代文学をめぐる本シンポジウムにおいて、筆者は下記のような導入的な問題意識を提示した。

「例年秋に行われるオーストリア現代文学ゼミナールの開催25周年を区切りとして、これまでゼミナールに招待した作家たちを中心に、オーストリア現代文学の特徴と歩みを様々な視点から討議する。まずオーストリア文学の特性をめぐるマグリスの「ハプスブルク神話」以後において提示された、古くて新しい「オーストリア文学」という概念がいまだ有意性を持ちうるかどうか、そもそも現代文学に適用しうるかどうかを問い直し、オーストリア出身のベテラン作家から若手作家にいたるまで、どのような文学傾向が見られるのか、オーストリア意識の在り方はどうであるのか、グローバル性とローカル性の両面をいかに保持・共有しているのか、など多様な問題を検討し議論したい。1960年代から90年代にかけては、まだいくつかオーストリア的な特徴が見られる。たとえば、地方性、終末論意識、言語懐疑、言語遊戯、反郷土性、反カトリシズム、反ユートピア、アナーキズム、自己イロニーなどであり、トーマス・ベルンハルト、ペーター・ハントケ、ペーター・トゥリーニ、エルフリーデ・イエリネク、ゲルト・ヨンケ、フランツ・インナーホーフ、ゲルト・ヴォルフグラーバー、ヨーゼフ・ヴィンクラーらの文学に共有される、閉塞的な状況に起因する鬱屈した抑圧感という特性に集約できるだろう。非政治的で微温的な美意識たる第二共和国の誇示・喧伝された牧歌性と、閉鎖的かつ伝統墨守のメンタリティとも呼ぶうる保守的風土に反抗し逃れようとしながら、自己批判的ないし憎悪愛的な自己意識によって引き裂かれ展開される悲観主義的かつ否定的な世界像とも呼べる特質である。これは現実隠蔽と現状維持に汲々とする退嬰的かつノスタルジックな「ハプスブルク神話」の現代的反照なのであろうか。地方的土着性に根差しつつ、大都市へ、さらに様々な異郷の世界へと広がっていく間テクストのポストモダンな普遍的想像力の所産なのであろうか。また近年とくに東欧出身の移民作家たちによって優れた文学的成果をもたらしているインターカルチュラルな文学も、新たなオーストリア文学の一側面を形成しつつある。」(日本独文学会2017年春季研究発表会研究発表要旨、16-17頁)

こうした問題設定のもとに、真道杉、ヴァルター・フォーゲル、徳永恭子、マルティン・クバチェクという4名の研究者により、多様なオーストリア現代文学の諸相が明示された。真道は、オー

ストリア現代文学ゼミナールの果たした役割から日本におけるオーストリア現代文学受容を論じた。フォーグルはウィーンの作家ペーター・ローザイにおけるコスモポリタニズムと郷土性の関係を論じた。さらに徳永は、数名の中堅オーストリア作家たちの作品解釈を通して、周縁性と国際性の相克および関連を明らかにした。そしてクバチェクは、オーストリアの若手作家たちの動向を、とりわけ辺境から世界への跳躍として、ローカル性からグローバル世界へと逃走・拡散するポリフォニー的な文学として考察した。その後の討論においても、オーストリア文学の特性をめぐる議論や、スロヴェニア語作家たちの問題、あるいはオーストリアにおける若手作家や越境作家に関する質問など、活発な意見交換がなされた。

### オーストリア現代文学研究に関する最新の研究紹介

こうした現代オーストリア文学に関する先行研究として、まず2015年に刊行された『文学と批評』シリーズの特別号『オーストリア現代文学』(Text + Kritik, Sonderband: Österreichische Gegenwartsliteratur, München 2015)を取り上げたい。本書には個々のオーストリア現代作家論に加えて、諸作家の傾向と概観を与える論文が二つある。

一つはアメリカ在住のゲルマニスト、ヨーゼフ・W・モーザーによるオーストリア現代小説に関する論文(Joseph W. Moser: Der Österreichische Gegenwartsroman, S. 129-139)である。モーザーによれば、保守性の強いドーデラーやレルネット＝ホレーニアらの伝統を断ち切ったベルンハルトやイエリネクにより、「過去の克服」への批判的な言説がなされ、オーストリアで批判を浴びたが、その後逆に代表的なオーストリア作家となったと指摘する。そしてオーストリアのユダヤ系作家たち、すなわちローベルト・シンデル、ドロン・ラビノヴィチ、ローベルト・メナッセにおいて見られるホロコースト問題、リリアン・ファシンガーとマーラ・ハーダラップに見られるオーストリア周縁の少数言語話者における「過去との対決」、ヴェルトリプ、ディネフ、ユリア・ラビノヴィチなど東欧出身の越境・移民作家の言語問題、ダニエル・ケールマン、グラヴィニチ、グラッターウアー、ガイガー、ホルチュニクなどポピュラー作家たちに見られる家族小説とアイデンティティの問題、ヴォルフ・ハースやエヴァ・ロスマンなどの推理小説の系譜を紹介しており、いくつかの作家グループに分けたうえで、その共通する特徴を概説しているが、とくにオーストリア性に関する突っ込んだ論究は見られない。

またもう一つの論文では、グラーツ大学准教授のギュンター・ヘーフラが、1980年以降に生まれた、最も若い世代の作家たちの特徴を分類・紹介している(Günter A. Höfler: Definitely Maybe. Zur Prosa der Generation Y, S. 310-321)。まずクレメンス・ゼッツ(1982年生まれ)やルーカス・メッシク(1988年生まれ)、コルドゥラ・ジモン(1986年生まれ)、ヴァレリー・フリッチュ(1989年生まれ)、ヴェア・カイザー(1988年生まれ)など、最も若い世代の作家たちを取り上げ、そこに新幻想性、ディストピア、超現実主義などを特徴として指摘している。さらに社会小説、恋愛物語、ポストロマン主義などに特徴づけられる作家たちや、心理的および内面的な葛藤を描く作家たちを紹介したあと、最後に若手で最も名声の高いカイザー・ミュレカー(1982年生まれ)について、田舎や小都市を舞台とする一見伝統的な世界に立ち戻りつつ、そこで描出

される気分は、冷たさと寄り辺なさ、および無理解に支配されており、世代を超えて受け継がれた罪の負荷とその拒絶が主題化されており、ハイパーモダンや時代精神の感受性に対する期待をあえて拒否しているという。このように、やはり主題の共通性や類似性によってグループ分けを行い、若い世代のオーストリア作家たちの多様性を簡潔に紹介している。ここでもオーストリア性にあえて踏み込んだ立論は回避されている。

以上、この最新のオーストリア現代文学論集を見る限り、明確なオーストリア性を探求するよりも、オーストリアの作家たちにおける様々の文学傾向・思潮を、共通するいくつかのグループ別に提示することに終始し、そこから従来の「ハプスブルク神話」に通ずるオーストリアの特性への探求には向かっていないことがわかる。

### 「オーストリア的なもの」とグローバリゼーション

では、かつて広く議論されたこの問題がなぜ後退してしまったのであろうか。おそらく、一つは1990年以降の冷戦終結と、オーストリアのEU加盟などによるグローバル化によって、各国民文学の枠組みを超えたヨーロッパ意識が前景化され、その結果として国家の枠組みを超えた共通言語による「ドイツ語圏文学」という意識がより強まったためであろう。ドイツ、オーストリア、スイスという各国別ドイツ国民文学の在り方が、マーケットとしての統合的なドイツ語圏文学に集約されていく一方で、ある種の「エクソチズム」としてのオーストリア性（あるいはスイス性）が書籍市場の宣伝に使われるという反転現象も起こっている。文学市場的に見ると、こんにちにおいても地方性や郷土性に根付くオーストリア性は明示的に認められると同時に、「ドイツ国民文学」に見られる典型的なドイツ的諸問題、たとえば戦後の非ナチ化や東西ドイツ統一後のドイツ状況など、とは一線を画したオーストリア独自の主題が多く確認できるだろう。そのなかでとくに重要な特徴として、ウィーン・グループを引き継ぐ言語実験派や言語革新的な詩人たちの系譜としての「言語懐疑」と「言語革新」への志向と、閉塞的な地方性への「愛憎」たる反郷土文学の系譜・継承という二つの要素が挙げられるだろう。前者が国民文学の有する規範性への反抗であるに対して、後者は戦後オーストリアにおける被害者意識の偽善性を暴露し、鈍感で予定調和的な政治意識と政治嫌悪・回避に反抗するものである。そこにハプスブルク神話的な退嬰的ノスタルジー志向への反発が見られる。そのとき偏狭性にとらわれた、反ユートピアとしてのオーストリア像が立ち現れてくる。こうした地方性と国際性との相互関係は、いわば文学が持つ二面性、すなわち個別の特殊な経験から出発し個性的な表現意思を有する作家が、その特殊性を通して普遍性へと向かう構造と連関している。

### 日本比較文学学会シンポジウム「森鷗外と多和田葉子―日独越境者の言語意識と文化受容」

もう一つのシンポジウム「森鷗外と多和田葉子」では、筆者が趣旨説明を以下のように行い、その後4名の研究者、つまり松永美穂、林正子、依岡隆児、越川瑛理が研究発表した。

「森鷗外と多和田葉子には、ほぼ百年間の時代差がある。この一世紀間に日独の歴史的社会的

状況も大きく変貌したが、両作家に共有されるのは深いドイツ経験であろう。ともに22歳でドイツへ渡り、そこでの異文化体験を通して、日独の比較文化社会的な問題意識を有するに至った。もちろん明治の作家と現代作家を単純に比較するのは難しく、そこから何か新たな比較文学・文化的な展望が開けるのかどうか疑問に思われるだろう。しかし、かたや近代日本を背負って洋行した森鷗外の文学的営為と、他方現代日本から自由意思でドイツへ渡り、日独作家として地歩を固めてきた多和田葉子のインターカルチュラルな文学活動とを比較検討することによって、個別の作家研究からは見えない共通の問題意識が浮上するようにも思われる。本シンポジウムでは、森鷗外研究者と多和田葉子研究者が、それぞれ両作家のドイツ経験の在り方を諸作品から読み取り、そこから両作家の生きた時代と社会を比較考察し討議する。また両作家とも独文学の翻訳も行っており、翻訳と創作の関係についても比較検討したい。多和田葉子のいう「エクソフォニー」的な視点から森鷗外を見るとどのように映るのかという、現代的な越境者の視線による森鷗外の再検討も行いたい。」(日本比較文学会第79回全国大会要旨集)

筆者は年譜を使って両作家の歩みと共通性、比較の方向性を提示した。松永は、森鷗外の「キタ・セクスアリス」(1909年)と多和田葉子の『傘の死体とわたしの妻』(2006年)を比較しながら、両者のジェンダー観を考察するとともに、鷗外の人称性に関して検討し、とくに多和田の文学における多彩な表現手段と、一人称の特徴的な使い方を分析・提示した。林は、森鷗外文学における「エクソフォニー」性を取り上げた。実体験の〈翻訳〉としての鷗外文学について、ドイツ三部作を主な考察対象とし、ドイツと日本という〈異郷〉と〈故郷〉の可逆的な内外空間を往来する際の、主人公、ひいては作者の葛藤そのもの、緊張関係そのものの産物としての〈エクソフォニー小説〉の意義を論じた。依岡は、森鷗外、多和田葉子とも「もの」と「ことば」、「真」と「名」が必ずしも一致していないという感覚を抱いていたと解釈し、ことばとイメージの間で生ずるこのずれの感覚を「浮遊感覚」と名付け、それを作品解読によって比較考察した。越川は、言語の交替によって生じる変形もしくは創造性をまず多和田作品において検討したあと、現代の日本とドイツの関係性のなかで作家の置かれた状況に留意しつつ、言語を媒介として、文化の媒介者となる鷗外をメタ的に取り上げる多和田の作品を考察し、さらに翻訳という作業を通じて創造性を高める作家の様相を探った。このように、両作家に通底する諸問題についてそれぞれ多様な比較の観点から新たな知見と刺激的な考察を知ることができた。その結果シンポジウム後の討論でも、両作家の問題意識の共通性と差異が改めて問い直され、きわめて活発な議論となった。

両作家のドイツ経験と翻訳の問題を比較検討することで見えてくる観点は、日独の社会文化的往還によって得られる価値・規範への批判的まなざしと相対化する価値意識、さらには母語によっては表現しえないものの可視化・言語化であろう。国民国家が有する価値規範は、他者性および多様性を内化することで揺らぐ。異郷に身をさらし潜入することで見えてくる自文化への内省こそが創作の源泉となる。森鷗外も多和田葉子もドイツという異郷において日本人性を自覚し、ドイツにおいてははからずも日本文化の代弁者となって、「偏見に満ちた」ドイツ人の日本像を是正しようとする。また日本に戻れば体得したドイツ的思考・視点によって日本社会文化における不可視の側面を照射する点も共通する。これは深い異文化経験を有する者には不可避の過程とも

いえるが、作家の場合はそれが言語表現にも作品の内実にも反映されており、文化を越境することの積極的な意義をそこに見出すことができる。他方では、近代を背負う鷗外が日本語の文体を構築しようとしたのに対して、多和田は日本語の文体を相対化・異化しようとする。いわば日本語文学の規範を確立する立場と、そうした規範性を破壊ないしは動揺させる立場の違いが見られるが、これは無論、近代を形成する明治期と近代を超克する現代という時代の要請の対比ともいえよう。

## 二つのシンポジウムをつなぐもの

最後にこれら二つのシンポジウムの関連性について若干の検討を加えてみる。まずいえることは、オーストリア現代文学をめぐる議論が、グローバリズム時代における国民文学の問題を新たに問い直すとする志向を持つものに対して、日独越境作家の比較論では、国民文学への再構築と革新ないし異化という対比でとらえられる。森鷗外と多和田葉子の文学が日独社会文化に存する諸問題を比較しつつ越境する試みであるとすれば、他方オーストリア現代文学の持つ特徴の一つも、自国への「愛憎」から由来する故郷への固執と批判から、他者への自己開示および自己洞察に向かう一種の普遍化プロセスだといえるだろう。もしそうであるならば、これはまさに現代の越境文学研究の領野と重なってくる問題でもある。たとえば、オーストリア現代文学の一角を占める移民文学の代表的な作家たち、ウラディミール・ヴェルトリプやユリア・ラビノヴィチなどに共有される異質性とアイデンティティの問題もまさにこの問題と通底している。冷戦時代のソ連から、ユダヤ人としての迫害を受けてオーストリアに亡命・移民したヴェルトリプの場合、ドイツ語を創作言語として選び、オーストリアやドイツ語圏の読者に向けて自らの出自・来歴とオーストリアへの同化プロセスを冷静に描出している。偏狭なオーストリア性のなかに越境作家が潜入して見えてくる風景は、他者性や異郷性を含んだ多元的な共同体であり、この構造の背景となるのが、オーストリアの持つ多言語多文化性を支える「ハプスブルク神話」なのであろう。異質な他者としての自己像である異邦人性を、「多元的なオーストリア共同体」へと馴化させるわけである。東欧や南欧からの文化的影響を絶えず受けてきたオーストリア・ハンガリー二重帝国時代から受け継がれてきたこの多民族多言語性こそ、オーストリア性の根底に存する要素であるが、それが戦後は「ナチズムの犠牲者として自己正当化を行ってきた」偏狭なオーストリア共和国の愛国的保守的な「事なかれ主義」と排外主義的な閉塞感として批判されてきた。1970年代に始まるこうした「不十分な過去の克服」への反抗から、90年代冷戦終結後のEU参入を経て、グローバリゼーションの渦中に巻き込まれてきたはずの「開かれた」オーストリアが、いまだにそのオーストリア・ノスタルジーから脱出できていない側面を持つのもまた一つの事実であろう。こうして「国民文学」という安定した世界像が崩壊しつつある現代において、越境文学の志向する「世界文学」こそが「間テキスト性」としての普遍性に向かう一つの方向性を示しているように思われる。世界文学は国民文学の総体ではなく、恣意的な個人の読書経験を通して読者のイメージに浮かぶ「読みの交差点」にあるのだろう。